学校だより
令和4年度1月号
なつのくも
第161号（R5．1．10）
練馬区立光が丘夏の雲小学校
本校ホームページ新QRコードです。スマホなどからも閲覧できます。ご活用ください。

「寄り添う」教育を…

校長　宮林　伸之

あけましておめでとうございます。昨年は、本校の教育活動にご理解、ご支援を賜りましてありがとうございました。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

今年は、卯年です。卯（うさぎ）は穏やかで温厚な性質であることから「家内安全」。また、うさぎは跳ねることから、「飛躍」「向上」を象徴するものとして親しまれてきました。他にも「植物の成長」という意味もあり、新しいことに挑戦するのに最適な年と言われています。

ことわざに「二兎を追う者は一兎をも得ず」とあります。これは、ヨーロッパで使われていることわざ（If you run after two hares, you will catch neither.）が語源です。同時に二つのことを行おうとすると結局、二つとも行うことができないことの例えです。

また、「獅子は兎を狩るにも全力を尽くす」ということわざもあります。獅子搏兎（ししはくと）とも同じ意味ですが、獅子（ライオン）は、ウサギを捕まえる際にも全力を尽くすことから、どんな簡単なことでも全力を尽くすことを意味する言葉です。

上記のことを踏まえて、今年は、一つ一つのことに対して万全の体制を整え、一歩前進の教育活動を推進していきたいと考えています。

こだまでしょうか

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。
「馬鹿」っていうと
「馬鹿」っていう。
「もう遊ばない」ってうと
「遊ばない」っていう。
そうして、あとで
さみしくなって、
「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。
こだまでしょうか、
いいえ、誰でも。

さて、話は変わりますが…

皆さんは、右記の詩をご存知でしょうか。金子みすゞさんの「こだま」です。東日本大震災後、テレビの公共広告で繰り返し流れたことが思い出されます。

題名の「こだま」とは、「ヤッホー」と言ったら「ヤッホー」と返ってくるように、相手の存在を「丸ごと受け入れる」ことです。

私が担任をしている時、転んで「痛い」と言っている子に対して「痛くない」「我慢する」と、一方的に伝えたり、励ましたりしていたことを思いだします。相手の存在を「丸ごと受け入れる」なんてほど遠いことをしていました。今考えると恥ずかしいです。

しかし、東日本大震災がきっかけで、相手が「つらい」と言うとき、「つらくない」「我慢しなさい」「頑張りなさい」というのは、言葉のいじめであると考えるようになりました。そして、寄り添うことの大切さに気付きました。「寄り添う」とは、相手の存在を「丸ごと受け入れる」ことのように思います。

大人は、「忙しい」ことを理由に、他者（子供たち）を「丸ごと受け入れる」ことを忘れているときがあるかもしれません。「忙」という字は、「心」が「亡（ほろ）」ぶと書きますが、他者の存在が、自分の心の中に存在しなくなったら寂しいです。痛いときに「痛いね。」、つらいときに「つらいね。」そして、嬉しいときに「嬉しいね。」とこだまし、うなずくことが寄り添うことであり、優しさだと思います。

学校経営計画に

「子供に寄り添った指導を続けることが、いじめの未然防止につながり、児童が安心して落ち着いた学校生活を送ることができる。」

と、記しています。

今年のスタートを機に、子供に寄り添うとはどういうことか改めて考え、子供たちが笑顔で過ごすことのできる学校づくりを推進します。